

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 林 和宏



学位申請者 石井 沙和

論文名 曖昧：イタロ・ズヴェーヴォの文学的戦略と結末の関係

審査の結果

本論文はイタリアの小説家イタロ・ズヴェーヴォ（1861-1928）の作品の特徴とされる曖昧さを分析したものである。代表作の『ゼーノの意識』に分析対象が偏り、主人公と語り手のアイロニーに起因する意図の不明瞭化をもつばら問題にしてきた従来の研究では不十分であるとして、多くの作品において結末に向かって消失する視覚イメージが共通している点に着目し、「欲望のカルテット」などの独自の概念を用いて幅広くズヴェーヴォ作品を分析して、この消失イメージとテキストの曖昧さとの不可分の関係性を明らかにした。構成や概念操作に改善の余地が若干認められるものの、斬新な着眼と新しい視点の提示によってズヴェーヴォ研究に確実な貢献をなしうる十分な価値を有していると判断して、審査委員会は全員一致で本論文が博士の学位にふさわしいとの結論に達した。

なお審査委員会は、林和宏を主査とし本学の和田忠彦教授、松浦寿夫教授、山口裕之教授、学外の土肥秀行准教授（立命館大学）を副査とする5名によって構成された。

論文の概要

第一章では、ズヴェーヴォの長編小説三作『ある人生』『老境』『ゼーノの意識』を対象に取り上げ、ルネ・ジラルルの「欲望の三角形」の概念にもとづいて、それぞれの主要登場人物の関係性が「欲望の主体」「欲望の対象」「欲望の媒体」「対象の補完」によって構成されるカルテットとみなされる。そしてこのカルテットの関係性には排除の機能が内包されており、この排除の機能の目的は主体の直線的欲望の達成にあり、それによって主体が自身の欲望の正当性を主張することが明らかにされる。他の二作品と異なり主人公が自殺する設定をもつ『ある人生』においても、この自殺の意図が欲望の保存にあることが導き出される。

第二章では、直線的欲望を達成するために個人の内部に生じる主体性の保護と維持を目的とした運動を主体の「誠実さ」と捉え、個人の内部における欲望の運動が分析される。

「誠実」というものが本来、意識内部の分裂と重複を内包し、主体の二重性の一致を求め

る概念であることを確認した上で、ズヴェーヴォの作品において「誠実さ」への言及がなされる場面を分析し、主人公の「誠実さ」は主体の二重性の均衡が保たれている状態であることが明らかにされる。そして『ゼーノの意識』のテキストの分析から、「誠実」が自身の欲望に忠実な状態を指すものであり、主体内部の個人的自己と社会的自己の双方に生じる欲望の運動が相互に阻害せず調和している状態を表わすことが突き止められ、この「誠実」のいわば立体交差的構造がズヴェーヴォの特徴である点が力説される。さらに「誠実」が主体に与える影響を中編小説『よくできた冗談』の分析を通して考察し、人間の性質が生み出した欠如を補綴する欲望と、補綴の産物を利用した境界侵犯によって、視覚認識に対する不信が生じるとされる。

第三章では、「誠実」と欲望の運動が展開する社会的舞台を分析し、主体の対象である他者がどのように認識されるかが考察される。具体的には、不特定多数の他者との出会いが描かれる鉄道旅行を舞台とした中編小説『つかのまセンチメンタル・ジャーニー』を取り上げて、小説中の「火星に向かう鉄道」のイメージの分析を通して、他者と共有する社会的空間における自己の変容と他者に対する認識が考察される。まず、新しい旅行手段である鉄道が旅客の内部に与えた影響を空間との関わり方の変化から分析し、鉄道旅行が閉鎖的で疎外性をもつ空間であること、他方、外部では鉄道輸送の構造により個人が数値化され外界が座標化したこと、また火星という設定の妥当性の考察から、「火星に向かう鉄道」が作品の基礎的な構図をなすことが示される。次いで、閉鎖的な旅客とのコミュニケーション、鉄道による視覚情報の変化、旅する自己の把握の困難さを分析することによって、他者を認識する主体が考察され、その主体の思考から『つかのまセンチメンタル・ジャーニー』に描かれる時空感覚を分析し、火星は他者の象徴であるという結論に至る。

第四章は、カルテットから排除される人物が、ただ消失するのではなくて遠方へと導かれる点に着目し、テキストに表される遠方との親密さを、作品の舞台であり小説家ズヴェーヴォを育んだ都市トリエステの民族的・文化的に多様な空間との関係から分析し、現在地であるトリエステと故郷の地とに対する二重の帰属意識による主体の遠方志向と捉え、欲望を保存する手段であることを確認する。そして、カルテットから排除される対象が遠ざかる設定が対象のいわば幽霊化によるものであること、『ゼーノの意識』の結末部の分析から、遠方志向がもたらす周縁化の対象が健康であること、トリエステが境界の神ヘルメスによって象徴されうること、トリエステという空間を背景としたズヴェーヴォのテキストに現われる境界に対する意識を、作家の実生活における「作家としての位置づけ」と「ユダヤ人家系」の二点と関連付け、遠方との親密さをユダヤ人作家という視点から読み解く可能性があること、が考察される。

第五章は、ズヴェーヴォ作品の語り手が読者に不信や疑念を抱かせる「信頼できない語り手」であることを確認し、信頼性の低さのために読者の側から批評的視線を向けられる語り手を「すり抜ける語り」と名付け、主人公の物語と語り手が挟み込む批評とから生まれ

る時制の往復運動によって語りの時制が絶えず現在に立ち戻るようにすり抜け、それによりテキストの曖昧さが生まれると述べる。また、不完全な過去と不明瞭な未来に対する姿勢が、語りと登場人物に対する不信、無責任な語り手、暫定的な語りで表わされるところに曖昧さが生み出されるとする。さらに、結末に登場する盗みという主題が作品の核をなす現在の連続性を切断するのではなく曖昧な形で保留することが示される。最後に、この現在の連続性が様々なレベルで二重の認識を生み出し作品全体の基礎をなしていることが確認される。

最終試験は2015年11月13日に行なわれ、石井氏本人による論文の内容と意義についての説明の後、審査委員が講評と質疑を行なった。以下にその講評と質疑の概要を記す。

イタリアの文学史的・批評史的な観点から次のような指摘がなされた。ズヴェーヴォはいまや現代イタリア文学史の小説のジャンルにおいて中心を占め、20世紀のイタリア小説の代表格とされるが、本論文で言及されているように、その評価には浮沈があり、作品の再発見と再評価の続いた第二次大戦後において、本論文も大いに依拠するところのあるデベネッティとラヴァジェットの研究が重要な貢献をした。この二人の研究に対して、今回、新たに加えている点は何であるかが必ずしもはっきりと示されていないように感じられる。他の多くの研究と異なり、アプローチにおいてトリエステや精神分析の文脈を避ける意図は明確に読み取ることができ、この点は本論文の独自性として評価されることは間違いないが、その上でどのような新しい論を導けたのか効果的に示されていない憾みがある。この指摘に対し石井氏は「誠実」に関する第二章が従来の研究にはない点であると応じた。これに対し、「誠実」のかたちを支えている二重構造モデルは、ラヴァジェットにおいてすでに指摘されており新しくないのではないかと再指摘がなされたが、石井氏からは、単なる二重構造ではなく決して交わらない立体交差的構造を提起している点が新しいという説明がなされた。

ズヴェーヴォ研究の一般的傾向として、長編小説三作のうち『ゼーノの意識』に考察対象が偏りがちであるが、本論文は他の二作『ある人生』と『老境』も含めて三作を論文全体において万遍なく扱っており、この点はポジティブかつ新しい選択として評価される。その結果、三作に共通する筋の型の抽出にも成功している。さらに長編以外の中編小説『よくできた冗談』と『つかのまセンチメンタル・ジャーニー』にも十分な考察を向けている点も本論文の功績であり、この二作を扱った部分はまとまりがよく論としてもすぐれている。第四章においてズヴェーヴォの背後に異質な「中欧」が認められるということならばスラヴ圏の影響も吟味すべきであろう。

より広範な観点からは、様々な示唆に富む興味深い論文であるとして、次のような指摘がなされた。20世紀文学・美術のいくつかの特徴にうまく接続するモチーフを抽出できている。例えば、本論文の独創性の核となる第二章の「誠実」は、信用の問題と考えること

ができ、それは貨幣あるいは金融という 20 世紀的な新しいシステムを支える要素であり、ジッダの『贖金使い』も同時代の作品である。第四、五章で論じられる速さや近さは、時間と空間のパースペクティブにまつわるものであり、つねに消失点が前提とされる意味においては、ベンヤミンのアウラ論にも通じる。ジラルの「欲望の三角形」の図式を援用した「欲望の四角形」の発想は、三者の関係がいかに関第四者の消失に負っているか、つまり意味を成立させる不在の問題を浮かび上がらせる。第三章で扱われる窓ガラスのモチーフは透過と反射の媒介物として、ズヴェーヴォ作品の通奏低音として指摘される灰色はあらゆる色を含むものとして、さらに議論を展開させる可能性をもっている。

構成あるいは論述に関しては次のような指摘がなされた。各々の章においては十分に論が成立しているものの、全体としての有機的な構成にやや欠ける。そのため全体的な論証の方向性が不明瞭になるきらいがある。論文のメインタイトルに掲げられた「曖昧」の概念が最終章にようやく登場するためサブタイトルにいう「戦略」というよりも効果のように映る。タイトルに再考の余地があることは石井氏からも自覚している旨の発言があった。概念装置が無防備に運用されるきらいがある。第五章で用いられる「すり抜ける」という独特な表現はわかりづらく充分には生きていない。「欲望の三角形」に加えられる「対象の補完」は内在的論理で説明されるべきであるにもかかわらず帰納的な印象を残すのは残念である。登場人物の相互関係を表わすカルテットは、本論文に独自性を与える重要な考えでもあり、第三章の他者の補助線をよりよく理解させることにもなるので、ぜひ図示することを勧めたい。

最終試験では手厳しい指摘もなされたが、それは本論文の十分な価値を認めたくえでさらなる考察の深化と発展を期待してなされた半ば助言というべきものであり、石井氏は本論文の到達地点をよく自覚して的確な応答を行なった。

以上、論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員会は全員一致で本論文が博士の学位に値するとの結論に達した。